西洋経済史B第7講　石油トラストの成立（と解体）　2004年11月26日

塩見治人他著『アメリカ・ビッグビジネス成立史』(東洋経済新報社、1986年) 谷口明丈「第5章　スタンダード・オイルと石油産業」より

【1】クリーブランドの征服
【2】全国市場の征服
　［1］集油ラインの部門の統合と全国市場の征服
　［2］1879年トラストの設立
【3】スタンダード・オイル・トラストの成立
　［1］長距離（トランク）ライン部門の統合
　［2］スタンダード・オイル・トラストの設立

はじめに
1859年　エドウィン・ドレイク　ペンシルヴァニア州タイタスビルで最初の油田掘削に成功
→ジョン・D・ロックフェラーーその後の石油産業の発展における中心的役割
・アメリカで最初の「垂直的統合企業」スタンダード・オイル設立
・スタンダード・オイルー石油産業を独占的に支配
19世紀後半のアメリカ石油産業がおかれた特異な環境
①原油産出地域ーペンシルバニア州を中心とするアパラチア油田と1885年に発見されたライマ=インディアナ油田に集中
②石油製品に対する需要ー照明用の灯油に限定・輸出比率が高い
③アメリカ石油産業が世界市場を独占（ロシアの原油産出量は増大傾向）

【1】クリーブランドの征服

1863年　ジョン・D・ロックフェラー　クリーブランドに精油企業（**「単純企業」**）スタンダード・オイル設立
1860年代前半　最初の油井掘削後のブーム→南北戦争後終焉→精油業不振の時代へ
→生産方法の改良と不良企業の淘汰

	1863年	1870年
精油所数	300以上	155

1870年代　極度の過剰生産能力（1870年　生産能力＝需要の3倍）
1873年恐慌→個別企業ー**コストを切り下げ**て価格競争へ
　　→**鉄道の競争関係**を利用した運賃コスト切り下げ

鉄道会社間の激しい競争（東部と中西部を結ぶ幹線のケース）

ニューヨーク・セントラル鉄道

エリー鉄道

ペンシルヴァニア鉄道

ボルティモア&オハイオ鉄道（1874年にシカゴ到達し、競争参加）

・鉄道企業はより多くの輸送量を確保するため、差別運賃の供与が一般的な競争手段となっていた。⟷差別運賃の獲得によって他企業に対して競争上の優位に立つためには、輸送量において圧倒的格差をつけなれければならない。×どの**「単純企業」**精油企業にとっても困難

オハイオ・スタンダード社（1870年にスタンダード・オイル社から改組）は当時最大の精油企業であったが、他社と輸送量の差はそれほどなかった。

→南部開発会社（サウス・インプルーブメント）との合併

南部開発会社　1872年1月設立（クリーブランド（精油中心地）・ピッツバーグ・ニューヨーク・フィラデルフィアの有力企業13名が株主　クリーブランドからはロックフェラーはじめ4人のスタンダード・オイル関係者のみが参加）

南部会発会社設立をめぐる鉄道会社との交渉

・南部開発会社－参加企業の積み荷を各鉄道に分配

・鉄道会社－多額のリベートを南部開発会社に支払う。

→非参加の精油業者にとって絞殺的な鉄道との差別運賃協定を意味

・原油生産者・アウトサイダーの精油業者の反対運動展開

→1872年4月　ペンシルバニア議会－南部開発会社の許可取り消す。

・一見、原油生産者・アウトサイダーの精油業者の勝利？

・スタンダード・オイルは、南部鉄道会社を脅迫手段にして、クリーブランドの主要な精油業者を合併する（**「地域的結合企業」**へ）。

1872年中に、クリーブランドの残りの精油業者もほぼほとんど合併

→1日1万バレルの原油処理能力（全国の能力の20％以上を占める）

→鉄道会社から安定的に差別運賃を獲得する物質的基盤

スタンダード・オイル－ニューヨーク・セントラル鉄道と1年間の秘密協定を結び差別運賃を得る。1874年にはエリー鉄道とも協定結ぶ。

→鉄道会社と恒常的な大量取引関係を結ぶことによって結合関係を形成し、そこから特別な利潤を獲得することに成功。

鉄道－精油所（輸送－製造）という垂直的統合

スタンダード・オイル－精油業における優位な地位築く

×精油業全体に存在する過剰生産能力の問題は解決されず。不況は継続。

→プールの設立

1872年8月　石油精製業者連合設立（原油を割り当てることによって生産と販売、さらに

は価格を統制しようとする）→内部対立とアウトサイダーの存在により 1873 年 6 月解散

【２】全国市場の征服

［１］集油ラインの部門の統合と全国市場の征服

スタンダード・オイルの脅威ーペンシルバニア鉄道の存在
ペンシルバニア鉄道ー子会社エムパイア輸送会社とともに南回りの石油輸送をほぼ独占
エムパイア輸送会社ー各油井から鉄道のターミナルまで原油を輸送するパイプライン（集油ライン部門）に参入して、集油ラインの敷設と合併を推進→集油ー鉄道という油井から精油中心地までの一貫輸送体制を築く。
ペンシルバニア鉄道が他の地域の精油業者と結び、低い運賃を与えるならば、スタンダード・オイルの運賃上の優位性は失われる。→スタンダード・オイルは、みずから集油ライン部門に参入して集油ラインー鉄道ー精油所という垂直的統合を形成し、原油の一貫した流れを押さえようとする。
1873 年、ノベルティー・パワー社（後、アメリカン・トランスファー社と改称）設立し、集油ライン部門に参入
バンダグリフト&フォーマン社の３分の１のインタレスト獲得
1874 年、同社のラインを基軸にしてユナイテッド・パイプライン社設立。
垂直的統合の完成

集油ライン	鉄道	精油所
アメリカン・トランスファー社	ニューヨーク・セントラル鉄道	スタンダード・オイル
ユナイテッド社	エリー鉄道	

→鉄道会社に対する交渉力を強化すると同時に、集油ラインのコスト郵送コストにおいても優位に立つ。
精油企業の合併戦略
①各地の有力精油業者との資本的結合をはかる。
②そうして結合された有力精油業者は各自の地域の精油業者を合併する。（**地域的結合企業**へ）
③こうした結合（①②）を秘密にし、経営も従来の経営者がそのまま行う。
→1874～1875 年にかけて、ニューヨークのチャールズ・プラット社をはじめ各地の有力企業との結合すすめる。
ペンシルバニア陣営の反撃
　1876 年　精油部門に参入し、みずから集油ラインー鉄道ー精油所という**垂直的統合**を形成し、スタンダード・オイルに対抗
→スタンダード・オイルーペンシルバニア鉄道から全貨物を引き揚げ、両陣営の闘争は激

烈化　しかし、当時すでにペンシルバニア鉄道は、その石油輸送量の 65 %をスタンダード・オイルに依存していたため、この闘争は、ペンシルバニア鉄道の輸送量の激減と財務状態の悪化をもたらし、ペンシルバニア鉄道はスタンダード・オイルの軍門に下る。

・スタンダード・オイルーエムパイア輸送会社の集油ラインを取得

・また、中立系のコロンビア・コンデッド社を同時に買収→重要な集油ラインをすべて支配→鉄道会社はその石油輸送を完全にスタンダード・オイルに依存→スタンダード・オイルによる差別運賃の取得は、鉄道会社間の競争関係の利用という段階から、強制という段階へ質的に変化

スタンダード・オイルの地位①集油ラインー鉄道ー精油所という垂直的統合を強化②運賃面での圧倒的優位確立③原油の買手独占を形成し、原油コストうえでも圧倒的優位

→スタンダード・オイル社ーコスト上の圧倒的優位性を武器に、スタンダード・オイルとその同盟者である各地の有力精油業者は急速に精油部門での合併を推進する。→スタンダード・オイルは、各地に多数の事業単位を配置する**全国企業**へ成長（1879 年までに精油部門の 90-95%を支配→全国市場の支配）

［２］1879 年トラストの設立

・クリーブランドにおける合併ー合併された各企業は完全にその独立性を失い、その資産は、オハイオ・スタンダード社の資産に編入され、スタンダード・オイル経営陣が完全に経営権を掌握

・全国的規模での合併戦略を展開する段階における困難

①法制度上、オハイオ州法に基づいて設立されたオハイオ・スタンダード社には他州のプラントを所有することも、他企業の株式を所有することも許されていなかった。

②各地の有力企業の経営者の経営権を完全に剥奪するかたちで合併することは不可能だった。（スタンダード・オイルは全国最大企業であったが、各地の有力企業を完全に屈服させて合併する力はなかった）

→この段階でのスタンダード・オイル社の合併戦略の直接的目的ー産業全体の過剰生産能力を整理すること。自社の優位性を背景に、この精油業全体の共通の利益に掲げつつ、各地の有力精油企業とう同盟関係を結び、全体の生産量と価格を規制する。（各地の石油プールを資本結合によって強化した「ルースな連合」）

1879 年 4 月　トラスト設立（全国 29 企業の株式もしくは資産のすべてが新たに任命された 3 名のトラスティーに預託された。3 名は預託された株式と資産を保管し、それから生じる利益をオハイオ・スタンダード社の株主にその持株比率に応じて分配する役割を担う。

→トラスティーの任務は事務的なことに限られており、トラスト全体を統一的に経営する権限はなかった。従来の入り組んだ預託関係が整理され、スタンダード・オイルが支配する資産全体に対して、オハイオ・スタンダード社の株式の所有数に応じて権利をもつとい

う統一的な関係が形成された。

【3】スタンダード・オイル・トラストの成立

［1］長距離（トランク）ライン部門の統合

1879年　タイドウォーター・パイプ社がコーレイビルからウィリアムズポートまで110マイルの長距離パイプライン（従来不可能とされていた技術革新）を完成→石油輸送の新時代はじまる。(原油輸送費の大幅引き下げ可能に)
タイドウォーター・パイプ社の長距離パイプラインと、原油生産者・独立の精油企業が結びつけば、スタンダード・オイルの集油ラインー鉄道ー精油所という垂直的結合による優位性をくつがえされる危険性。→スタンダード・オイルと鉄道会社はあらゆる手段を動員してこの危険性を排除しようとした。
スタンダード・オイルの最終的対抗手段ーみずから長距離ラインを建設ー長距離ラインのコスト面での圧倒的優位性を認識するや、1879年たちちに長距離ライン建設に着手→クリーブランド・ニューヨーク・フィラデルフィア・ピッツバーグへのラインを次々完成させ、81年には、集油ラインと長距離ラインを包括的に支配・管理する組織としてナショナル・トランジット社を設立→スタンダード・オイルは長距離部門でも独占的地位を確立し、集油ラインー長距離ラインー精油所という**垂直的統合を完成**した。集油ラインー長距離ラインー精油所という社会的分業の継起的初段階を「企業内分業」として内部化
①原油輸送を完全に支配することによって輸送コスト上の圧倒的な優位を確立
②この垂直的統合はきわめて高い**参入障壁**として作用
スタンダード・オイルと同じコスト水準で競争するためには、同じ垂直的統合を実現しなければならないが、当時の長距離ラインの最適規模は日流量1万バレルで、東海岸までの300マイルのラインの場合、200万ドルの建設費を要し、そのうえ、1万バレルの集油ラインと精油能力と結合する必要があった。→事実上不可能。もし、こうした結合を達成して、新規参入したとしても、それは1万バレル以上の精油能力を追加を意味し、価格下落をもたらすので、この点からも、参入は非現実的。→スタンダード・オイルは高い参入障壁に守られて、巨額の独占利潤を安定的に獲得することが可能になった。

［2］スタンダード・オイル・トラストの設立

スタンダード・オイル　集油ラインー長距離ラインー精油所という本来的な垂直的統合を完成→原油の輸送コストを大幅に低下させる。精油所の
長距離ラインが1万バレルの最適規模をもつために、長距離ラインの末端に1万バレルの精油能力を結合することが必要となった。→従来、多くの地域に存在した多数の精油所の

ドラスティックな整理・統合を要請する。→全体を計画・調整していくためには、「ルースな連合」から、経営権をトップ・マネジメントに集中し、中央集権的な支配・管理機構を形成する必要が生じた。

1882年1月　スタンダード・オイル・トラスト設立

ジョン・D・ロックフェラーをはじめとする9名のトラスティからなるトラスティ会議に最高意思決定権を集中し、トラスト全体を各州1企業に組織的に単純化して、経営委員会が集権的に管理していく機構を形成した。

表 5-1　石油産業の発展

(1バレル=42ガロン)

年	原油生産量	精製油生産量	輸出比率
	千バレル	千バレル	%
1859	2	—	—
1869	4,215	3,267	67.0
1879	19,914	12,656[1]	55.2
1889	35,164	27,662	46.6
1899	57,071	48,181	41.2
1904	117,081	55,640	37.2
1909	183,171	107,314	33.0
1914	265,763	182,880	24.7
1919	378,367	355,002	15.7
1924	713,940	637,350	14.6
1929	1,007,323	988,266	13.3

(注)　1) 1878年から1881年までの平均。

(出所)　原油生産量は、U. S. Bureau of the Census, *The Statistical History of the United States from Colonial Times to the Present*, 1976, pp. 593-594. 精製油生産量と輸出比率は、Harold F. Williamson and Arnold R. Daum, *The American Petroleum Industry :The Age of Illumination 1859-1899*, 1959, pp. 338, 485, 615, 742 ; Harold F. Williamson, Ralph L. Andreano, Arnold R. Daum and Gilbert C. Klose, *The American Petroleum Industry : The Age of Energy 1899-1959*, 1963, pp. 168, 443 より作成。

図 5-1　スタンダード・オイルの長距離ラインと主要精油所（1884年）

(注)　すべての精油所が図示されているわけではない。表5-3も参照。

(出所)　Williamson and Daum, *op. cit.*, p. 444 と表5-3より作成。